

一陽 峯 壁を越える

南アフリカ（南ア）という国とかかわりはじめて、もう三〇年になる。想定外のいくつかの出来事が記憶に残っている。

最初のエピソード。

一九八七年、スウェーデンで世界の反アパルトヘイト運動の関係者が集まる国際会議が開催された。解放運動ANC（アフリカ民族会議）の代表団と私を除くと、参加者は欧米人ばかり。同年に日本の対南ア貿易が世界一になり、翌年には国連総会で日本非難決議が採択されるという時期だったので、肩身が狭かった。

ところが、ANC代表団と懇談していると、ひとりの活動家がこんなことをいい出した。「日本の乗用車の輸出は何も悪いことではない。黒人の庶民も日本車に乗っているんだ。問題なのは、武器を輸出する国々だ」。経済制裁の対象を広げようとするANCの公式見解とは逆の発言に、周囲の活動家たちはぎょっとしていたが、その後、彼はANC駐日事務所の代表になり、現在は南ア政府の外務事務次官を務めている。新世代の黒人エリートの一として、飛ぶ鳥を落とす勢いで出世していった。

第二のエピソード。

アパルトヘイト撤廃後の一九九九年、私は南アのステレンボッシュ大学に招かれてアジア論を講義する機会に恵まれた。人種差別を公言する白人政府の首相を輩出してきたエリート大学だから、昔だったら近寄る気にもなれなかった場所だ。

ところが、私を招請してくれた教員の研究室に入ってみて驚いた。壁にマルクス、エンゲル

スの肖像写真が高々と掲げてある。彼は兵役で南ア軍の諜報機関に配属され、敵の共産主義者の思想を探るために、マルクス主義文献の精読を命じられたのだという。しかし、資本主義の解剖学の論理に魅せられた彼は、まさにミイラ取りがミイラに、つまりマルクス主義者になってしまった。一九八〇年代にANCと白人政府の非公然の交渉を仲介したのが、彼のステレンボッシュ大学の同僚たちである。彼自身の関心は、やがて計量政治学に移っていく。

最後のエピソード。

東日本大震災のすぐ後だったので、去年の四月頃のことだと思う。満員の総武線に乗ると、同じ車内に、スプリングボックス（南アのラグビーチームのシンボル）のジャージを着た外国人カップルがいた。そんな格好をしているのは南ア人しかいないだろう。ところが、ラグビーはいまだに白人のスポーツのはずなのに、白人青年と黒人女性の組み合わせである。声をかけようかと迷っているうちに、若い二人は御茶ノ水駅で降りて、親しく談笑しながら雑踏に消えていった。原発事故のために在日外国人が激減していた時期である。南アの友人たちにこの話をすると、誰もが「南アではありえない光景だ」と驚く。私自身、震災の余波で、まるで白昼夢を見ていたような気がする。

個人がどんなに抗つても、歴史には逆らえない。その一方で、小さな例外だったはずの事象が、何かのきっかけで社会の大きな流れを変えていくことがある。南アの一〇〇年後の姿が、私にはまったく予見できない。日本の一〇〇年後の姿も。